

紀要

■設立50周年記念号Ⅱ

円筒上層式土器における土偶意匠の展開と実態

—認識の更新と深化に向けた素描— 瀬口 眞司 (1)

滋賀県における縄文時代早期後葉～前期前葉遺跡の集成

..... 小島 孝修 (20)

はじまりのモニュメント

—縄文晩期における墓配置の一事例— 松室 孝樹 (28)

上砥山遺跡出土木製品の年輪年代測定からみた出土遺構の数値年代

..... 前田 仁暉・星野 安治・内田 保之 (35)

大津市神領所在瀬田廃寺造営過程の検討

..... 小松 葉子 (42)

八幡山城跡出土軒平瓦についての一試論

—主に製作技法・製作痕跡から— 山口 誠司 (54)

滋賀県内出土の江戸時代の化粧道具

..... 田中 咲子 (63)

長浜市八雲書院資料調査報告＜瓦編1＞

..... 古山明日香・福井 知樹 (68)

茶の利用についての研究ノート(1)

..... 小竹 志織 (85)

文化財の保存と活用のこれまでとこれから

—調査法人滋賀県文化財保護協会の取り組みから— 堀 真人 (91)

35

茶の利用についての研究ノート（1）

小竹志織

目次

1. はじめに
2. かつての茶の栽培地を探る
3. おわりに

— 論文要旨 —

私たち日本人にとって日常的に飲む身近な飲料と言えば煎茶・ほうじ茶・番茶などであろうか。紅茶やウーロン茶も、ここ数十年で当たり前のお茶となっている。どの茶も同じ植物から作られるが、そもそも「茶」の利用はどのように始まったのか。茶樹の原産地や日本での起源については諸説があるが、様々な状況から中国大陆から何らかの形で渡来したものであるとされている。

本稿では日本における茶の歴史を概観し、日本の茶栽培のながれを確認した。また、現在、山中などでみられる茶の樹の様相を解明するため、かつての茶の栽培地を調べる試みをした。今回は米原市旧伊吹町の藤川・吉槻・甲津原において、現地での聴き取り調査を実施できた。藤川では伊吹町史にみられた「藤川茶」の名称については確認できなかったが、かつての茶畑のことや、集落のあちこちに茶樹がみられ、今も自家用に活用されていることがわかった。甲津原では町史の記述どおり、茶の樹はなく、なぜ茶をつくっていないかは解明できなかったが、代替茶のことを調査できた。吉槻については江戸時代の状況までたどることはできなかったが、集落のあちこちに茶樹がみられ、集約的な茶畑の様相ではなかったが、自家用などに土留めや垣根を兼ねて生育している様子がみられた。

今回の調査結果は上記の2例の報告になる。

——— キーワード

茶 栽培 藤川 吉槻 甲津原 バイ（チャボガヤ）

1. はじめに

(1) 茶とは何か

そもそも「茶」とはどのように定義できるのか。多くの場合、何某かの植物の成分を湯または水で抽出をして飲用するのが「茶」であり、それに利用される植物が「茶植物」とされるであろう。各種ハーブも茶に含まれ、ミントやカモミール、日本的なものではヨモギ・ドクダミ・ビワ・クマザサ等、様々な植物が健康飲料として活用されている。また日本独自の抹茶は植物そのものをすべて飲む茶である。

茶植物の代表格は何と言っても「チャ」*Camellia sinensis* であろう。茶利用の本場である中国には 30 を超えるチャ *Camellia sinensis* の近縁種があり、そのすべてが茶として利用されているという。これらは分類上の特徴に基づいて厳密に同定されてはいない(山口 2013)。古代の人々が飲んでいた茶のもととなるチャの木は、どのようなもので、その利用はどのように始まったのか。茶樹の起源や、チャ利用の文化の発生と伝播については諸説があり、詳しくはここでは触れない。茶樹の原産地および日本での起源については、その遺伝的形質の研究も進んできており、現在日本で生育している茶樹の形質などが中国種に近いこと、日本の原生林にはその種の茶樹が自然に生育する条件が揃わないことなどから、中国大陆から何らかの形で渡来したものである、というのがおおむね現状での見方である。

(2) 日本の茶の歴史

日本での茶の歴史についてひととおり概観する。

文献等から日本における茶の歴史を見てみると、『奥儀抄』の「公事根源」に聖武天皇が天平元年(729)4月の誕生会に「百人の僧を内裡に召し、大般若経を講ぜしめ、第二日目に行茶の儀と称して茶を賜う」とあり、これが「茶」の文字の初出とされる。また天平期(729~748)に書かれた『東大寺要録』には、僧行基が「諸国に堂舎を建立する事四十九箇所、これに茶木を植えた」とみえ、この頃、飲茶と茶の栽培が一部の寺院や上層階級社会で行われたことが窺える。

また、延暦24年(805)、「伝教大師(最澄)が中国より茶種(茶樹)を携えて帰朝し、比叡山麓の近江湖畔(坂本村井神)に植えた」(『日吉神社道秘密記』)とか、嵯峨天皇の大同元(806)年、「弘法大師(空海)が中国より茶種子(茶樹)と石碾を携えて帰朝し、製法を伝えた」(『弘法大師年譜』)とか、弘仁元年(810)には「はじめて賞茶式を立て給う」(『本朝古物起源』)などが伝承されている。

『日本後紀』『類聚国史』には、弘仁6年(815)、嵯峨天皇が唐崎に巡幸し、梵釈寺に立ち寄った際に、梵釈寺の僧永忠みずから茶を献じた、とあり、その二ヶ月後には「畿内および近江、丹波、播磨等の国に茶を植え毎年朝廷に茶を献上させた」との記事もみられる。奈良・平安時代、宮中の貴族層や中国から帰朝した僧侶階級の間では、渡来文化の素養として喫茶文化が嗜まれた事がうかがえる。たしか

に、延喜式には茶の栽培方法が見られ、宮中内裏の地図に茶園の区画が描かれたものがあるなど、一部の上流階級が利用する程度の茶の栽培はあったようである。しかし、「畿内および丹波、播磨等」の諸国から茶を献上させたということから、日本に自生のチャの植物体があったとの見方をする研究者もいるが、現在ではこの「自生説」は疑問視されている。

その後約400年にわたり茶を記した文献は見当たらず、建久2年(1191)、僧栄西が中国から持ち帰った茶の種子を佐賀県の背振山にあった霊仙寺石上坊の境内に蒔いたとされる。栄西はこの茶園の種子を高山寺(京都市右京区)の明恵上人に贈り、それが建永2年(1207)、梅尾(京都市右京区)に播種された。これが今日の飲茶や栽培茶につながるものと言われる。

栄西は宋代の抹茶法を日本に伝え、茶のもとらす徳について説き『喫茶養生記』(建暦元年(1211))を記している。この新しい茶法・喫茶の考え方は、明恵上人との親交により普及し、曹洞宗開祖の道元により「茶礼」という礼式が形成され、禅僧の修行や寺院の生活に茶が浸透していった。しかし、茶は一般庶民のものではなく、貴重品として貴族や寺院などの上層階級の社交の道具に用いられた。

南北朝期から室町時代にかけて茶筌が加わり、今日の抹茶の点て方が形成され、茶会の構成や喫茶亭・客席の設営にいたるまで形式が整えられていく。この茶礼式は次第にひろがって、東山文化を創り、安土桃山文化へと受け継がれる中で、茶の湯、茶道として確立していく。

庶民に茶が普及していくのは、江戸時代に煎茶が始められてからのことである。煎茶の製法は、摘みとった茶芽をはじめに蒸して、即冷却し、直ちに焙炉の火にかけた助炭の上にひろげて、揉みながら乾燥したものである。この蒸製の茶は宇治製または青製と呼ばれ、元文3年(1738)、山城国湯屋谷村の茶業家永谷宗円によって、手揉み法で製茶された。この煎茶が、格式にとらわれず風流を愉しむ禅院や文人にひろまり、徐々に民衆にも広まることになる。

茶が産業として発展していくのは安政6年(1859)の横浜開港に始まり、海外向けに茶が輸出されるようになってからである。明治維新前後の日本経済を支えたものは農産物が主体で、初期の輸出品では、生糸と茶が主力を占めた。維新後の茶の輸出量増大のため、輸出港の横浜に近い相模・武蔵などで新興の茶産地が形成され、東海地方でも士族の帰農により大規模な茶園が開拓される。また従来の産地である京都府・滋賀県・三重県・静岡県などでも貿易向けの生産が増強される。そして、栽培・製造・容器など、すべて機械化され、効率重視の生産体制に変容していく。

茶の輸出は、一時は伸びるが、他の産地との競争、販路の問題、戦争による産業の低迷など紆余曲折を経て、昭和20年(1945)の敗戦後生産量は激減する。

戦後、輸出を再開するも、世界の茶市場のながれの中で

日本の茶は売れなくなり、横浜開港以来の輸出に頼る状況は崩壊した。国民の食生活の変化による緑茶離れ、嗜好飲料の多様化に伴う需要減、若年層の茶に対する無関心傾向がみられる一方で、高級紅茶、中国茶の輸入は増えている。さらに多様化するニーズを見越して、日本の茶業は変化していく時なのかもしれない。

2. かつての茶の栽培地をさぐる

(1) 山で見かけたお茶の樹

近江に数多ある山城跡やその周辺を歩いていると、たまにこぼれ種で勝手に生えてきたような茶の樹を見かけることがある。山間地の平坦面は城跡なのか寺跡なのか、それとも後代に開墾された畑なのか判然としない例があるが、水利が悪く田畑をつくりにくいところには、果樹や茶の樹を植えるのはよくあることだという(秋田 1983)。

近江はもともと、茶の伝来・栽培の古い伝承がある土地であり、信楽の朝宮、坂本の日吉、永源寺の政所など、それぞれに開祖伝承をもつ。特に近代以降、輸出のために日本の各地で茶の増産施策が展開され、一時期はそれまでの畑以外にも畑は広げられた。今も県内全域に茶の栽培地があり、主要な産地以外にも栽培している所がある。しかし、かつてはもっと様々に茶が栽培されていたようで、野山で見かけた茶の樹は、かつての茶畑の名残りなのだろうか。

いつも茶葉を購入する馴染みのお茶屋で聞いた話や、今は茶産地として知られていないが昔の記録などを手がかりに、山中などでの茶栽培について調べてみることにした。

(2) 伊吹山麓付近の茶生産

『伊吹町史(文化民俗編)』(伊吹町史編集委員会 1994)の生業・生産の章には、茶の生産について、いくつかの興味深い記述がある。

- a. 茶の栽培は町内各地で広くおこなわれている。
- b. 「殊に吉槻では小堀藩(小室藩か)の藩命によって栽培、上納されていた」ようだが、それ以外は自家用で他所への販売は限られていたらしい。
- c. 甲津原では茶が育たない。
- d. 伊吹町と隣接する春日村(岐阜県揖斐郡揖斐川町)では溪谷沿いに茶畑が開かれ、揖斐茶・春日茶の産地として良質で生産量も多かった。しかし、伊吹町側ではあまり茶の栽培は盛んではない。

e. 「藤川の河岸段丘は茶の栽培に適したところ」「昭和年代に入ってから一時栽培も盛んに行われ、これらは主として美濃へ送られた」「一時藤川茶の名も得た」「戦時中に生産も減少」「今日では自家用が主で出荷量は少ない」「春日茶、揖斐茶とブレンドしたものがある」「長浜でもかろうじてその名を残している」とある。

上記の点について、町史編集からおよそ 30 年が経過しているが、この記述を裏付けるような実態はどうなっている

のか調査することにした。米原市旧伊吹町の文化財担当者に相談したところ、現地のことをよくご存じの地元の方をご紹介していただくことができ、b の吉槻、c の甲津原、e の藤川については現地でお話を聴くことができた。

(3) 聴き取り調査の内容

① 藤川について

e の藤川の状況については、旧伊吹町教育委員会が作成した藤川宿の町並みマップ(図 1)には「製茶商」という記載がある。旧町の担当者曰く、茶の販売をしていた家が今もあり、今はもうあまりお商売をしていないが、その家のご主人・中川英継氏をご紹介していただいた。

- ・英継さんで 3 代目。昭和 28 年頃(英継さんが中学生のころ)は、3 段・4 段の手摘みの茶畑があった。
- ・肥料としてササ・豆かす・油粕を入れた。
- ・最盛期の頃は、茶摘みに垂井から 5～6 人出稼ぎで手伝いに来てもらう。出稼ぎの人は藤川のあと、春日に行つて茶摘みをする(春日の方が冷涼で新芽が出るの遅い)。
- ・茶揉みには伊勢から手伝いに来てもらった。
- ・垂井の白井製茶に製茶に出した。
- ・出荷先は主に長浜。長浜の茶屋が買いに来た。
- ・昔はこの辺りでは年 4 回茶摘みした。
- ・玉露は宇治に買いに行った。
- ・茶の栽培は自家用程度。畑のまわりに植えているものを手作業で摘むか刈り、蒸して筵の上でもんで太陽で干す。

「藤川茶」の名称についてはご存じなく、春日茶が良質で量もあったことはご存じだったが、それとのブレンドについては不明だった。お話の後、かつての茶畑があった場所を案内してもらったが、どこも緩傾斜地で日当たりの良いところであった。今は植林されたり、耕作放棄の畑になっているが、所々茶の樹が残っていた(写真 2)。また、茶の樹を生垣替わりに植えていても(写真 3・4)、収穫して自家用の茶をつくっている家はそれほど多くないらしい。

② 甲津原について

甲津原の雪晒しのヌノ(麻布)のことやトチやバイの実の採集加工など、この集落ならではの昔ながらの暮らしについてお詳しい方の一人、山崎トミ子さんにお話を聴いた。

しかし、甲津原でなぜ茶の樹を植えていないかについてはわからず、「昔からつくっていない」「茶が必要なときは甲賀(旧伊吹町東草野地域)まで行って物々交換した」とのことだった。また昔は、山仕事に行くときは、現地で湯を沸かして持参のネギと味噌で味噌汁をつくり、その辺りのクマザサを刈って生の葉を煎じて茶にして飲んだ、ということだった。ここ甲津原では笹麦茶を製造販売しているが、その原形と言える。そして、笹麦茶の製造工程、特産のミョウガやカブ、伊吹大根などの漬物加工のことなどをお聴きできた。また、奥伊吹や湖北で利用されるバイ(チャボガヤ)の実と言う木の実の加工方法を教えていただき、カヤ

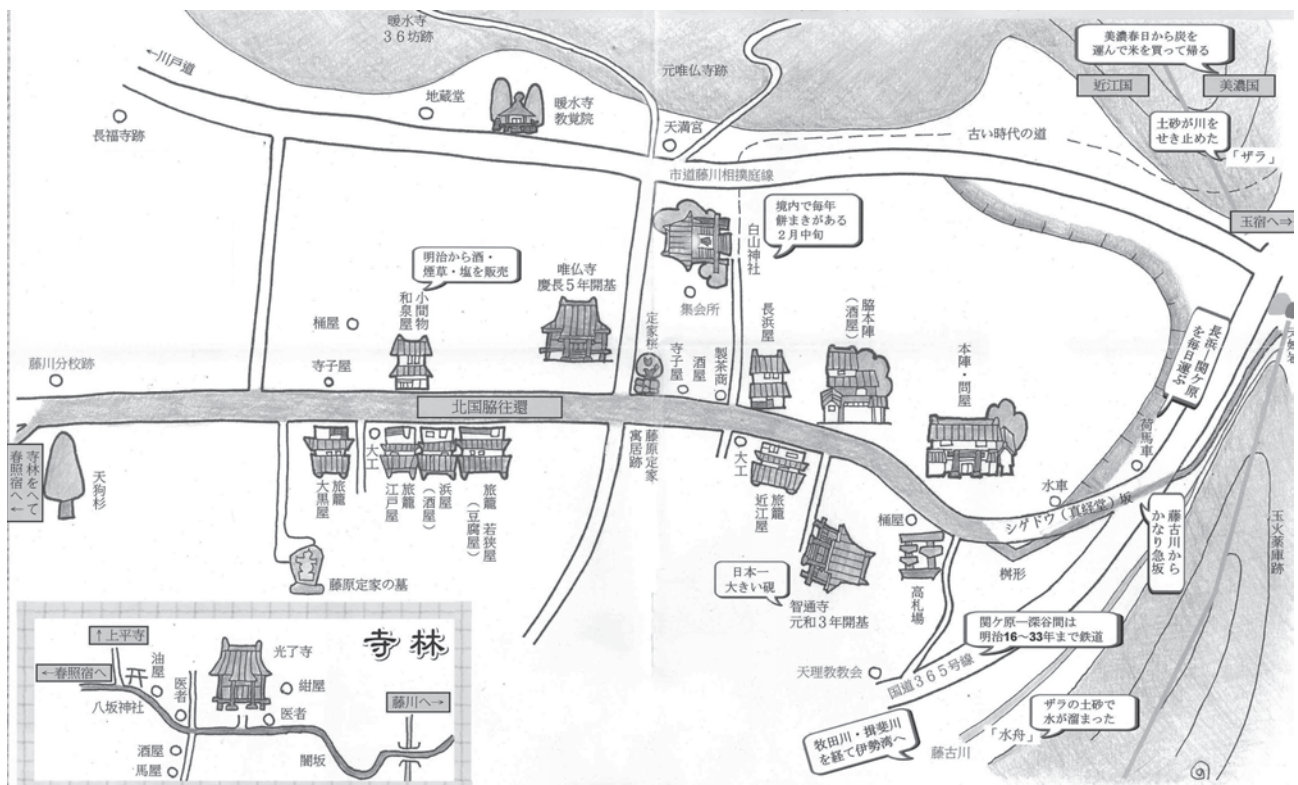


図1 藤川宿イラストマップ



写真1 中川さん宅の裏に生えていた茶の樹



写真2 北国脇往還に面した元畑地？に生えていた茶の樹



写真3 畑の境界に垣根としてある茶の樹



写真4 畑の縁に植えられた茶の樹



図2 旧伊吹町内の峠道



写真5 吉原さんの隣家の生垣はぐるりと茶の樹



写真6 写真5の生垣には茶樹に混じってパイも見られる



写真7 吉原さんの畑と隣との境の垣根の茶樹



写真8 民家より山際に近い畑の近くの茶の樹



写真9 山際近くの茶樹の花のアップ



写真10 七曲峠への道の傍にある石仏

とパイの実を戴いた。どちらも独特の風味があるが、アーモンドのようなおいしい木の実である。

③吉槻について

吉槻のことに詳しい吉原景文さんにお話を聴くことが出来た。

吉槻で江戸時代に藩に納めるほど栽培していた様相についてはよくわからないということであったが、現在、吉原さん宅の周りで茶の樹が植わっているところを何カ所か案内していただき、見学した。また、吉原さんのお宅で自家製のお茶を戴き、普段どんな加工利用の仕方をしているかなどをお聴きできた。

- ・(吉原さんの)隣の家の生垣はほぼ茶の樹。茶の樹の間にパイの樹がたまに混じっている(写真5・6)。

- ・茶を植えているのは田んぼや畑の境界、へり、棚田・段々畑の段差の石垣の周辺。以前からある種類で特に新たに植えたりしていない(写真7・8)。

- ・石垣のところの茶の樹は良い芽が出る(石が蓄熱するから)。

- ・今は自家用のものでも4〜5軒くらいしか収穫していない。昔は自家用をどこも作っていた。自分で製茶しないなら、製茶所(関ヶ原)にもっていった。

- ・(自家製の製茶法について)以前は蒸していたが、今は大鍋で乾煎り、しんなりしたら手でもむ。もむのは力が要るし大変。最近はミルサーで粉末にするから適当にもむ。

- ・春一番の新芽は鹿にやられる。霜にもやられる。人間は次にのびてきた新しい芽を採る。鹿が古い葉も食べるので、二番目でもそんなに悪くはない。

- ・七曲峠から霧があがってくる(図2)。

- ・風が吹くと寒い。雪が積もってしまうと案外寒くない(冬の積雪1mはあたりまえ)。

- ・昔は田んぼの畦にパイ・あぜ豆も植えていた。

- ・昭和30年頃までは蚕も飼っていた(年一回だけ)。

繭は各家個別に長浜に持ち込んでいた。

- ・七曲峠を越えて向こう、鍛冶屋(長浜市浅井町)まで歩いて40分くらい。子供のころは風船ガムを買いに行ったりした(鍛冶屋までいけば大体の日用雑貨が手に入る)。

(4)聴き取り調査のまとめ

藤川は伊吹山東南の藤古川扇状台地を走る北国海道沿いに展開する集落で古くから宿駅として栄え、東は美濃、関ヶ原に通じ、北は木ノ本、敦賀、北陸方面につながる交通の要衝である。加えて、日当たりの良い河岸段丘の傾斜地、扇状地の水はけの良い土壌、川霧の発生などは茶の栽培に適している。そのためこの地で茶の栽培、および集散地として茶の商いなどが盛んになったものと思われる。

吉槻は姉川峡谷の中央部、河岸段丘が連なり起伏のある明るい小盆地が広がる山里で、古くから拓け、峡谷に散在する集落の中心的な役割を持つ。特に近江と美濃を結ぶ太

古以来の要衝にあたり、七曲峠を越えて浅井から木ノ本・敦賀に至るルートと、甲津原に至り美濃へ通ずる北路、南下して板並から国見峠を越えて春日村に通ずる南路があって、交通の要衝・物資の集散地として重要な役割を果たしてきた集落である。また、吉槻盆地一帯は姉川砂礫の堆積層で水はけが良く、日当たりの良い拓けた里、七曲峠から上がってくる霧という茶の栽培に適した条件も揃っている。

以上のように、藤川・吉槻のいずれも交通の要衝、茶の栽培に適した環境である。こうした条件が茶の栽培が国を挙げて奨励された時期には大いに適合し、一時期は盛んに栽培されたものと思われる。今日も栽培適地であることから、細々と茶の栽培利用がなされているのであろう。

3. おわりに

今回の聴き取り調査は伊吹山麓の2か所の事例を紹介した。今後も現在の生産者の状況の調査、関連資料の洗い出し等も含め、少しずつ調査地を増やす予定である。こうした調査がその地域を見直す一助となることもめざしたい。

【謝辞】

今回の調査にご協力いただいた、藤川の中川英継氏、吉槻の吉原景文氏、甲津原の山崎トミ子氏に感謝申しあげたい。また、米原・湖北地域のことをいつもご教示いただき、調査の際にも多大なご協力をいただいた米原市生涯学習課の高橋順之氏、いつもおいしいお茶と興味深い話をご教示くださる大津市の中川誠盛堂茶舗の中川武氏にも併せて感謝申しあげたい。

文献一覧

- 秋田裕毅(1983)『開かれた風景』サンブライ出版
- 伊吹町史編集委員会(1994)『伊吹町史(文化民俗編)』
- 伊吹町史編集委員会(1995)『伊吹町史(通史編下)』
- 大石貞男(2004)『日本茶業発達史』大石貞男著作集1』社団法人 農山漁村文化協会
- 平凡社地方資料センター(1991)『滋賀県の地名』平凡社
- 松崎芳郎編著(1992)『年表茶の世界史』八坂書房
- 松下智(1993)『ティーロードー 日本茶の来た道』雄山閣
- 南廣子(1990)『茶茶茶』淡交社
- 山口聰(2013)「チャー 癒し空間をつくる植物、その起源」『栽培植物の自然史Ⅱ』北海道大学図書刊行会

挿図典拠

- 図1 伊吹山文化資料館(2010)『藤川宿の「まちなみ」マップ』から転載
- 図2 伊吹町教育委員会(2002)『ふるさと伊吹探訪シリーズ3 北国脇往還』から転載
- 写真1〜10 小竹撮影

(こだけ しおり：総務課 嘱託)

ANNUAL BULLETIN
of
Shiga Prefectural Association for Cultural Heritage
Vol.35 2022.3

私たちは文化財をとおして
ゆたかな滋賀づくりに貢献します。



公益財団法人滋賀県文化財保護協会
Shiga Prefectural Association for Cultural Heritages